

～国際協力の巻～

平成17年度自治体国際協力専門家派遣(窯業)及び平成19年度自治体国際協力促進事業(窯業技術支援)を通じたクレアの活用について

カンボジア王国コンポン・チュナン州窯業支援事業
クメール陶器の復活と農村の生活向上のために

栃木県産業技術センター窯業技術支援センター特別研究員 塚本 準一

事業実施に至る経緯

カンボジア王国コンポン・チュナン州は、「一州一品」の村興し運動を推進するため、特産品の陶器作りで村民の生活水準の向上を図り育成事業を立ち上げました。これは、SEILAプログラムという農村開発プロジェクトの一環で農村毎に地方振興事業を地域住民が中心となって行うものです。しかし、伝統的手法で製造しているため、生産量やデザインが限られているだけではなくマーケティングにも問題があり、陶器製造技術研修プログラム、デザイン、マーケティングに基づいたマニュアルやカタログ開発が必要でした。また、カンボジアは、内乱のため産業を支える知識者や技術者が不足しています。栃木県は、これらの事業を支援するため(財)自治体国際化協会(以下、クレア)を活用し、平成17～18年度に自治体国際協力専門家派遣(窯業)を、平成19～20年度にコンポン・チュナン州窯業支援のモデル事業を実施しました。

現状の把握と支援活動のために

カンボジアの首都プノンペンから北北西に約100kmに位置するコンポン・チュナン州は古くから土鍋の産地として知られてきました。コンポン・チュナンとはクメール語で“土鍋の浜辺”という意味です。陶器作りの村は何世代も前から農閑期に副業として近くの山裾から粘土を採掘し、土鍋を作っています。この作り方が独特で直径40cm、高さ60cm位の丸太を中心に作り手が廻りながら粘土を紐状にしたものを積み上げ土鍋を作ります。ある程度の高さに積み上げて口作り、少し乾いたら柄のついた板で叩きながら形を整えます。鍋底

は、膝の上で絞り込むように叩いて綺麗な曲線になるように仕上げます。土鍋はこの後、天日で十分乾燥させてから庭先で藁を被せて火を付け、その上に粗木をくべて焼く「野焼き」を行います。焼成温度は露天で焼くため低く、800℃前後です。このため、焼成温度が低いため強度が低く壊れやすい欠点がありました。そこで、コンポン・チュナン州は陶器の生産性を高めると共に高付加価値を得るため、釉薬ゆうやくが施し



昔ながらの土鍋作り

である綺麗で丈夫な焼き物を作ることを図りましたが、知識と技術不足から計画通りに成果は上がりず上手く行きませんでした。この様な状況の中、コンポン・チュナン州は改善を図るためにクレアを通じて二つの技術支援を要望してきました。

- 1) 製造技術：成形技術、加飾技法、意匠、焼成技術、釉薬調整
- 2) マーケティング技術：窯業に関する現状把握、消費者ニーズ調査、販売促進のためのPRと販売網の確立

これらの課題を短期の派遣で支援が出来るか不安を持ちましたが、クレア・シンガポール事務所で、技術支援活動をスムーズに行えるよう事前にコンポン・チュナン州の地方人材育成アドバイザーと村内を巡り、各戸の製造工程や設備や街の販売所(仲買人)などの調査を行ってくれました。ここで得た情報や資料から、釉陶器を作るのには二つの問題が有ることが分かりました。

一つは、高温焼成の陶器製作には、可塑性のある耐火度の高い粘土が必要なことです。今まで使用してきた粘土が使えるか、また、新たに粘土を探さなくてはならないのか等、難問が山積していることも分かりました。そこで、カンボジアの関係省庁、大学や研究機関を訪問してカンボジア国内やコンポン・チュナン州のデータや情報が有るか尋ねましたが、過去の内乱が大きく影響してか、ほとんど無いとのことでした。今後の支援をどうするかクレアと検討し、継続して技術支援する必要性が有るので、次年度も原料調査を重点に実施することになりました。粘土の確認のためクレアが現地の陶工たちが今使用している粘土の採掘場所や村の周辺に粘り気の有る土のサンプリングを行い、日本でその試料を熱分析、化学分析、焼成試験などを行いました。このサンプリングはただ単に採掘すればよいのではなく、こちらのマニュアルに従って丁寧に行ってくれたおかげで高温焼成に耐える粘土を探し出すことが出来ました。

国際協力促進事業で薪窯を作ろう

もう一つは、窯です。釉陶器は、高温(約1,250℃)で焼成します。村の現存する窯では構造的に高温に上げることが困難であり、益子で陶芸家が使用しているような倒炎式薪窯が必要です。このまま一過性の技術支援で終わるのではなく、継続した支援活動が可能であればやろう。その裏付けは陶器造りの陶工たちとの連帯感、作陶技法を身につけようとする真摯な姿勢を見て必ず良い成果が現れると確信したからです。クレアのアドバイスを受け、平成19年度から国際協力促進事業を活用してコンポン・チュナン州にこの窯を築くことにしました。しかし、県単独で薪窯を築炉し、高温焼成に必要な技術支援を実施するのは様々な問題があり困難であるため、国際交流の実績があるNGOや団体の協力を得ることにしました。

益子では、近年、益子国際陶芸協会が中心になり欧米や韓国などの陶芸家との国際交流が盛んに行われています。ワークショップ、作品展示などその活動は益子地域の活性に大きく影響しています。この益子国際陶芸協会がコンポン・チュナン

州の窯業技術支援活動に参加してくれることになりました。

メンバーの陶芸家を派遣し、薪窯を陶工と一緒に作り、窯高温焼成による陶器製作のため技術指導を実施しました。自治体と支援団体が相互に得手、不得手なところを補い合うことで困難な目標を達成できたことで、国際協力、技術支援に有効であることを強く感じました。



薪窯作り：村の人たちとレンガ積み

益子での研修

また、日本の焼物を肌で実感し、これからの焼物作りに活かすためコンポン・チュナン州からはアドバイザーと陶工2名が、栃木県益子町にある窯業技術支援センターで釉薬調整技術、石膏型制作技術を研修し、陶芸家の工房では、登り窯の焼成体験、町内の民芸店で陶器がどの様に展示販売しているか等の視察を行いました。この研修期間、益子国際陶芸協会のメンバーが食事など研修時間外のお世話をしていただき大変喜ばれました。

最後に

自治体が国際協力で技術支援を行う難しさの中、普通では考えられないほどの短期間に薪窯の築窯と陶器作りの技術指導を行い素晴らしい成果が出せたのは、クレアの事業実施のためのきめ細かな事前調査、また、関係各位に協力、理解を得るための調整などサポートを受け出来たと感謝しています。

コンポン・チュナン州の窯業支援事業は、専門家派遣から7年目になり、事業主体を変えましたが、益子の陶芸家を中心に今も行っていて、一步一步着実にクメール陶器の復活に向かって進んでいます。

* * *

クレア本部では、事業の実施前後の陶器を比較展示しており、品質が大きく向上したことを実感いただくことができます。